

大工の棟梁だった父の仕事の勉強で京都の神社仏閣や、永平寺、比叡山延暦寺などの建築を見た時の感覚は今でも覚えています。その頃から、建築に関係した仕事に憧れを持っていました。小学生の時、紙粘土で西洋の城を作る授業があり、熱中して作った城の中の空間や、内部空間から外を見た風景を想像して感動した記憶は今でも思い出すことができます。また同じ頃、音楽の授業でバッハのゴールドベルグ協奏曲を聴いた時、紙粘土の城の中に見た風景、例えば、丘の上に聳え立つ城や、その周りの風にたなびく草や色、太陽の角度や色が実際の風景のように蘇り、同時に旋律が城の中から流れているような、自分の記憶にない記憶が蘇ってきました。空間にはそのような不思議な記憶や環境を人間の中に作り出すことができ、空間創造という行為で、他人に感動を与え、共感することができるということを知りました。

実際に作るという大工から建築家になりたいと思ったのは大学に入ってからです。でもその時は、建築家になりたい気持ちも、50%、残りの50%は冒険家になりたいと本気で考えていました。大学時代登山にのめり込んだのですが、影響を受けた登山家は二人いました。一人は当時世界三大北壁を冬季に単独初登頂した長谷川恒男さんで、その頃にフンザで亡くなり、とてもショックを受けました。孤独な登山という世界で人間離れた偉業をなし遂げ生きぬくことは冒険だよという言葉は自分に大きな影響を与えました。もう一人は登山家のラインホルト・メスナーです。彼の山にはスピリット、マインド、ボディ3つが存在しているという言葉を知り感動しました。私も身体性と空間性が山にはあると感じていたからです。スピリットは霊的な魂、マインドは心、ボディは身体ですが、その3つの要素の調和が登山だと彼は言いました。当時、自分が生きていると言うリアルさや、これが空間だということを感じ求めています。小さい頃に感動した父の仕事や、寺社仏閣建築空間の体験や、記憶にない記憶の感動を、自分なりに理論付けて行こうと様々な本を読んだのですが、メスナーの言葉を知った

時に、次の週には、北アルプスに行っていました。山に行ったら完全に自分の境界が無限大に広がり自然と一体化したんです。生きていることに対する実感や楽しさに感動し、これが建築なんだと思います。また大学で「rummen」(ドイツ語で夢を見る)という名のクラブを作り部員を集め、大学時代は探検や山登りをしていたことが、自分を冒険家の道をあきらめられなかったことの理由です。

大学時代、医師及び探検家で、現在武蔵野美術大学教授でもある関野吉晴さんの講演会に行き直接お話しを聞く機会がありました。関野さんは人類がアフリカで発祥して南米へと至る大移動を、逆ルートでペルーからたどる「グレートジャーニー」という旅を何度かに分けて行った方なのですが、旅先の未開地には医者がいないため、医者としてその場所の人間の役に立ちながら、グレートジャーニーを続けたのです。

この生き方に共感しました。建築家はデザインする技術を活かし、建築を作り続けることで、社会や人間の役に立つことができ、世界中に必要な存在となります。そのためにも、私は建築家として生きながら、世界の人々のためにもなる空間や環境を創造し続けたいという、憧れみたいなものが今でもあるのです。



ROKI Global Innovation Center —ROGIC— 内観写真 Photo/新井隆弘

建築家は50%、残りの50%は冒険家だと思っている

自然と人間をつなぐ 新しいユニバーサルスペースを創造し続けたい



小堀 哲夫

Tetsuo KOBORI

JIA日本建築大賞、
日本建築学会賞(作品)を初の同年ダブル受賞した
建築家小堀哲夫氏の哲学とは



CONTENTS

Front Line ■ 建築家インタビュー 小堀 哲夫	2
News Topics ■ ニューストピックス ●機械式駐車装置を安全にご利用いただくために ●多層循環方式「NSPパーク」が新登場!	7
Arrangement ■ 納入事例 MEGURO CENTRAL SQUARE	8
Arrangement ■ 納入事例 小野薬品工業株式会社 東京ビル	10
Arrangement ■ 納入事例 品川リハビリテーションパーク 品川区立大崎図書館	12
Arrangement ■ 納入事例 東山ビルディング	14
Replace ■ リプレース事例 札幌商工会議所	15
Information ■ COMプレゼント	16

人々や社会が喜ぶ建築を作るには
自分の視点を変えないといけない

大学院では陣内秀信先生の研究室に入りました。陣内先生は設計者ではなく、イタリア都市史や江戸・東京の研究をされている先生ですが、ある時、「騙されたと思ってイタリアの調査に参加してみないか」と誘われたのです。



ROKI Global Innovation Center —ROGIC— 外観写真 Photo/新良太

参加を決め、まず北部のミラノやベネチアに入り、シエナ、アッジジなど山岳都市に感動し、ナポリのアジア感にびっくりして、さらに南に下って先生たちと合流しました。それまでも十分に観光立国としてのイタリアに感動したのですが、南イタリアのレッツェとバーリの調査に参加し、イタリア市民の目線から都市を見たときにイタリアの凄さを感じました。調査は現地の住宅をアボなしで訪問して、短時間で家の中を実測させてもらうのですが、人々は建築愛に満ちているのです。外国人が10人ぐらい突然やって来て、家の中を見せると言っても、日本では普通は見せないですが、イタリア人は違い、「どうだ、すごいだろう」と積極的に見せてくれ、自分の住む家に誇りをもっています。それが建築的には素晴らしい建物でなくても、そこに住む人たちが、都市や自分たちの環境に誇りをもっており、街全体がコミュニティとして生きながら、私たちのような異邦人も受け入れてくれるのです。

その瞬間、自分の見方を反省したのです。自分は観光客目線で感動し、本質を理解していかなかった。どの都市もどの建築もそこに住む人の目線や意識によって作ら

れ、ファサードは住む人々たちのインテリアなんだと思うようになりました。建築家が行うことは、あらゆる視点を移動的、俯瞰的に観察し、自分というフィルターを通して、家族、地域、街、都市と段階的に価値や意味を考えながらデザインしていく必要があると感じたわけです。私たちは常にその場所に住んでいる人たちと同じように都市や場所の誇りを発見し、人間や地域や社会が喜ぶようなものを作らないと、本当の意味の建築家にはなれないと思ったのです。

陣内先生の調査というのは寸法を測り、建物を分析して図面化し原理を探っていくのですが、この寸法を測ることに限っては、自分にはあと二人の先生がいます。一人目はル・コルビュジエです。彼が26歳の時、ト

多くの影響を受けた

建築家野口秀世さんとの出会い

私が卒業する頃は、ちょうどバブルが崩壊した時期でした。建築家が主催するアトリエ系の事務所は狭き門でしたが、久米設計に陣内研究室の先輩を頼って入所することができました。

バブルは崩壊していましたが、建築業界は景気の影響を受けるのが遅く、プロジェクトはまだ沢山進んでいました。30代で公共施設に挑戦的に設計している先輩の生き生きとした設計に対する姿勢を見ることができました。もともと影響を受けた建築家は野口秀世さんです。2006年にさくらホールで建築学会賞(作品)を受賞した

ルコ、ギリシャイタリアを巡る東方への旅に出るのですが、様々な寸法入りのスケッチを旅のノートに残しています。ローマ郊外のティボリにあるヴィッラ・アドリアーナというハドリアヌス帝の別荘も多くのスケッチが残っています。そして、ここでのカノーポスでのスケッチが彼の有名なロンシャン教会の光ポイドとしてイメージが反映されています。もう一人は、菊竹清訓さんの番頭さんである遠藤勝勸さんですが、多くの建物や部屋を寸法で捉えています。私自身にとっても、今でも実測は楽しい作業で、妻や子供たちとともに旅で実測を続けていますし、最近では建築家の仲間たちとバラガン自邸やパワの自邸を実測し多くの発見がありました。大学では学生に、常に観察し、実測することを勧められています。

野口秀世さんが、熱く建築を語り、人間のアクティビティが建築を作ると、毎夜熱弁をふるっていました。当時は事務所全体が素晴らしい建築家を量産し、野口さんの生き方そのものは組織の中の異物でありながら大きな影響力を持ち、常に創造的なイノベーションを起こしていたと思っています。思い出深いのは、「建築の鉄人」です。「料理の鉄人」というテレビの人気番組がありました。それが模したイベントを私たちが新人も含め組合で企画し、シラカンスの小嶋一浩さんや、早草睦恵さん、みかんぐみなど、多くの建築家と久米設計がお互い

の設計した建築を、批評し議論し、多くの影響や学びや、驚きを得ました。大学卒業したての自分は、そのような全く背景も考え方も違う多くの建築家とお話しができる機会を得たことが、事務所以外の建築家や他者はクリエイションに大切な要素だと感じる様になりました。

大企業や大組織になると、顔見知りの均質なコミュニケーションになってきますが、そこに全くの他者を入れるというのは相当な不安定な状態を作ります。ところが企業は、異質な人間、異質な文化を入れないと共同体は成長しないのです。そのことは独立した今、一番よく理解できています。

日本人が本来持っていた

感性や創造性を掘り起こす

私の作品で言うと、ROKIさんも日華化学さんも民間企業で、事業分野は全く違います。でも、根本の部分で考えていることやベクトルは同じなのです。今は時代の変化が早く、ニーズは数年で変わり、技術はもともと短くて一年二年で終わっていくわけです。ですから、こういうモノを作ってくれというニーズに対して「じゃあ作り直す」ではなく、「ニーズの前に主体的に考えて「こういうモノを作ります」というヴィジョンを創造する時代になってきたと思うのです。

主体的にものを考えるという感覚を、今までと同じ人材で実現するためには、教育だけでは変わらなくて、環境を大きく変えていかなければいけません。常に変化する環境に身を置かなくては何も創造できないのです。ROKI Global Innovation Center —ROGIC—のドーム状屋根は自社製素材のフィルターで覆われているのですが、天候が変われば室内の光環境も変わるし、全ての窓を開ければ空調も自動的に停止し、フレッシュな外部空間ともつながります。私が

身体的に感じた自然の感覚というものを、建物の中にながら外部の変化が感じられるようにすることで、そこで働く人々の心が揺さぶられ、新しい活動だったり、創造的な感覚が生まれるのではないかとというのが、私たちの建築への考え方です。そこに行き着くまで、ROKIさんと日本人の感性について議論し、一緒に旅もしました。あの桂離宮の月が池の水面に映り、ゆらゆら揺れること。キンベルの光が充填した空間。小堀遠州の孤篷庵忘室の障子から見えるわずかな庭が、広大な宇宙や自然を感じさせること。

日本人は建築を介在させることで、フィルターを通して自然を心の中で再解釈し、創造し愛でてきたのです。そういった日本人の感性は私は小さい頃から感じていました。また、これは全ての人類において共通できる感性です。私は日本人が本来持っていた感性や創造性、文化の記憶は、記憶のない記憶そのものを読み解いていくことが大切で、それが人々の心の中に波紋のように広がる建築につながると思っています。

新しいユニバーサルスペースに
チャレンジしていきたい

日華化学のイノベーションセンターは福井市の街中にあります。世界的に事業を展開しているこの企業は、創業の地である福井に世界中の人々が訪れる場を作ることが一つのテーマでした。イノベーションを起こすには自前主義を捨て、他者を入れ込み、オープンにすることが必要です。これらの考えを共有化するために社員とともにワークショップを行いました。私たちが場のイメージで提案したのはバザールというキーワードでした。バザールは唯一他者を受け入れ、共同体や街の周辺にある広場にできま

す。日華化学さんは一階の広場であるコモンスペースをバザール空間にして、カフェ

やレストラン、ヘアサロン、ショールームなどを作り、同じような大きさのコモンスペースを中心にして口の字型に、二、三階の研究員の研究室を作り、全てガラス張りにして、広場(オフィス)に面してオープンにしました。そうすることで今まで研究室に閉じこもっていた研究員を広場(オフィス)に出したのです。

もう一つのテーマは光と水です。北陸地方の冬は曇天が多い為に日照時間が非常に少なく光に対する欲求が当初からありました。また、福井は北アルプスからの綺麗な地下水が豊富であると同時に、大陸から1400年前に技術が輸入されて繊維業や



NICCA イノベーションセンター 内観写真 Photo/新井隆弘

機械式駐車装置を安全にご利用いただくために

全国66か所にニッセイ・メンテナンスサービスセンターを展開する当社メンテナンス本部では、この度、機械式駐車装置をより安全にご利用いただけるよう、安全対策に関するアニメーション動画の配信を開始いたしました。これは、国土交通省が公表している「機械式

立体駐車場の安全対策に関するガイドライン」に基づき、重大事故の発生防止の観点から作られた内容となっています。日精はこれからも、ご利用されるドライバーや管理者の皆様の安全を第一に考え、機械式駐車装置の製造・保守・点検に取り組んでまいります。

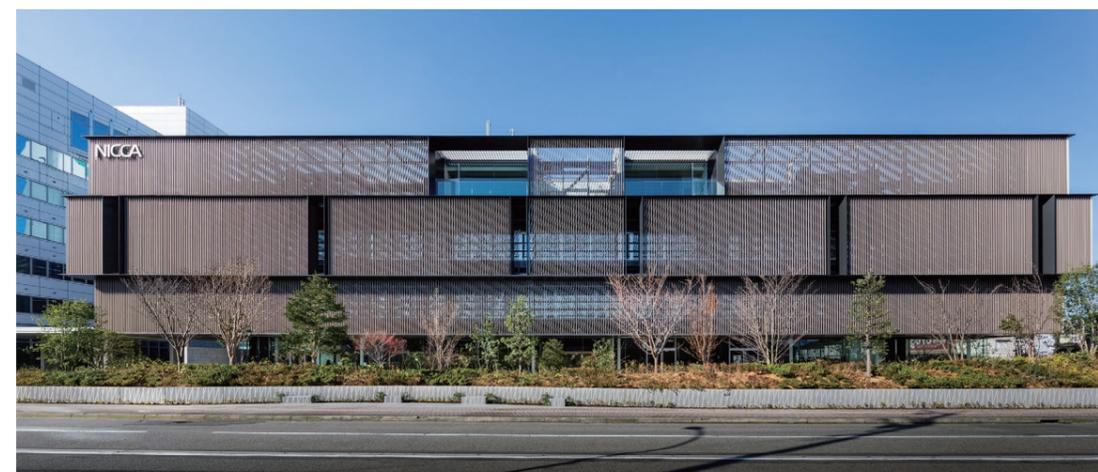
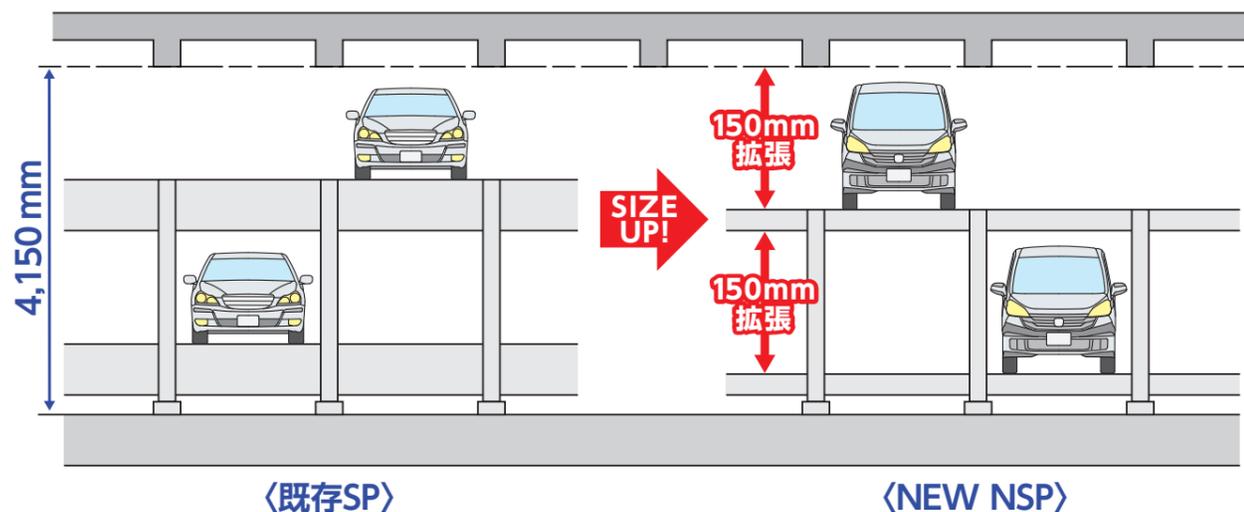
配信先はこちら <http://www.nissei.co.jp/parking/maintenance.html>



空間効率をさらに突き詰めた多層循環方式「NSPパーク」が新登場!

装置高さを大幅に圧縮する新たな技術力で開発された多層循環方式「NSPパーク」は、よりコンパクトで空間効率に優れたパーキングシステムに生まれ変わりました。収容車種のバリエーションが増えることはもちろん、全車種フラットトレーにも対応することができ、大型車のサイズも全長5500mm、全幅2100mm、重量

2600kgの収容を実現しています。さらに、老朽化した機械式駐車設備のリプレースでも、これまでの空間をそのまま活用しながら、ミドルルーフ車などの多彩な車種への対応や最新の安全設備への入れ替えなど、ますます便利なパーキングシステムへとスマートに進化させます。



NICCA イノベーションセンター 外観写真 Photo/新井隆弘

和紙産業が盛んです。私は福井にある朝倉遺跡の井戸遺構の多さから、地下水は今回の大きなテーマであると考えました。今回はROGICからさらに進化させてコン

クリートのスリットから光を探り込むと同時に、日射熱を除去する事にチャレンジしました。コンクリートの天井や壁には井戸水の熱源を利用した冷媒配管を打込むことで、新しい輻射式光天井を実現しました。地球と建物はアンカリングして井戸水は温度15度から18度ですから、熱源は地球です。又、熱だけ吸収した地下水は、還元井戸で地球に還しています。私がこの二つの建築で目指したのは、新しいユニバーサルスペースです。ユニバーサルスペースとは無柱空間でフレキシブルに変更できる建築の原型のようなものです。しかし、本来のユニバーサルはそのような概念ではないと思っています。ユニバーサルとは普遍的であるということです。宇宙や世界には多様な活動、多様な思想、多様な温度、多様な光環境があり、すべてが許容される場所こそが本来のユニバーサルスペースであり、決して均質ではない、本当の意味のユニバーサル。多様な環境を持つことが可能な場、だと考えています。私が現在取り組んでいるのは、多様な場を許容する新しいユニバーサルスペースの創造です。今、下関の大学を設計していますが、学生の居場所や多様な教育を行える場を創造し、先生自ら創造的に変化させていくことが可能な場も新しい教育環境の建築だと思っています。すべての世界や環境は多種多様です。これら新しいユニバーサルスペースは、様々な環境や活動に対応することが可能であり、自然と人間をつなぐものが建築です。そのような建築が多くの人々を幸せにすると思っています。

最後の1%に人の思いが込められているかが大事

機械式駐車場という、まずは経済的に物事を捉える必要がほぼ99%を占めると思うのですが、最後の1%には、人間の思いや環境や公共性がどう込められているかが大事だと思います。

それが設置する場所の選び方だったり、新しいビジョンを少しずつでも込めていくことで、都市の中で新たな公共性や人間性を帯びた新しい駐車場に変化していくのではないかなと思っています。



PROFILE

小堀 哲夫 Tetsuo KOBORI

1971年岐阜県生まれ。97年、法政大学 大学院工学研究科 建設工学専攻 修士過程修了。97年、株式会社 久米設計入所。2008年、株式会社 小堀哲夫建築設計事務所設立。現在、法政大学 デザイン工学部建築学科 兼任講師。

主な受賞

2015年、BCS(日本建設業連合会)賞、日事連建築賞国土交通大臣賞、中部建築賞。2017年、「ROKI Global Innovation Center -ROGIC-」でJIA日本建築大賞、日本建築学会賞(作品)を史上初の同年内ダブル受賞。

主な作品

「昭和学園高等学校」、「南相馬市消防防災センター」、「ROKI Global Innovation Center -ROGIC-」、「NICCA イノベーションセンター」。